（5）　中学校での実践

主体的で深い学びを成立させるためには、題材を通して当事者意識をもたせることや、学習活動の中で新しいことを発見させたり気付かせたりすることが重要になると考えます。研究のねらいに迫るため、題材を通して日常の生活行為を想起させる場面と協働学習を取り入れました（図14）。

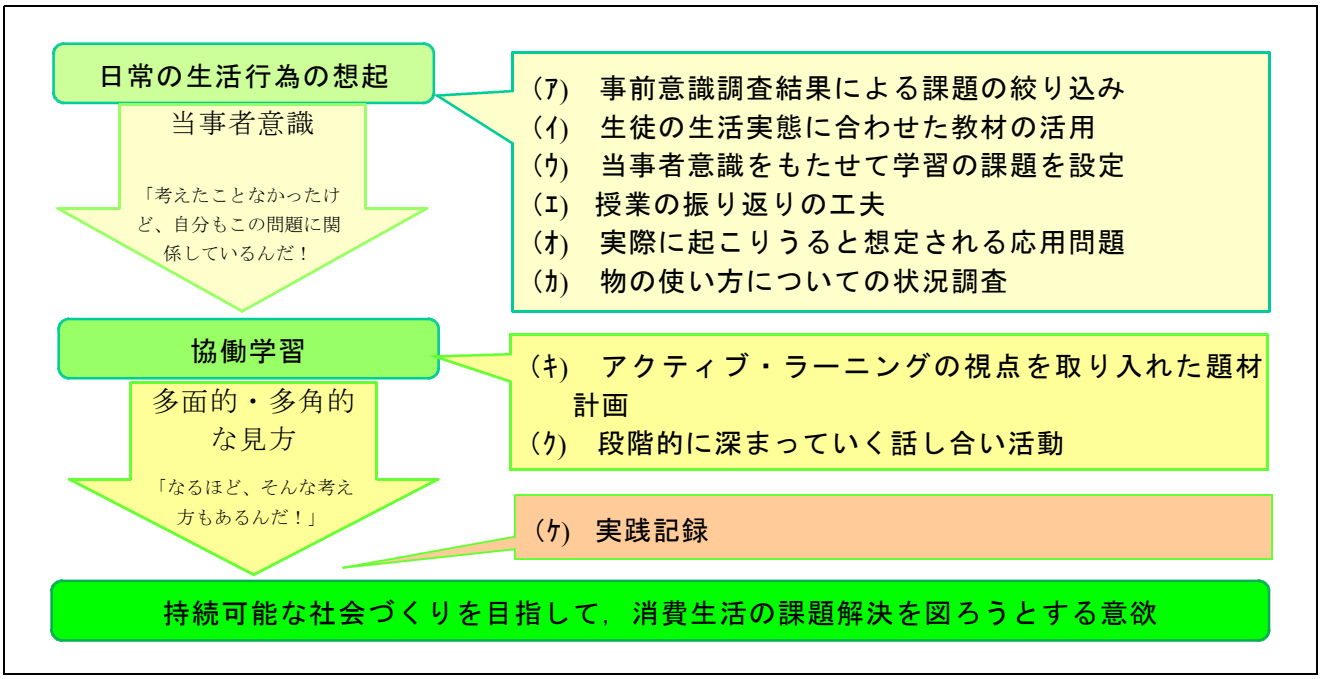


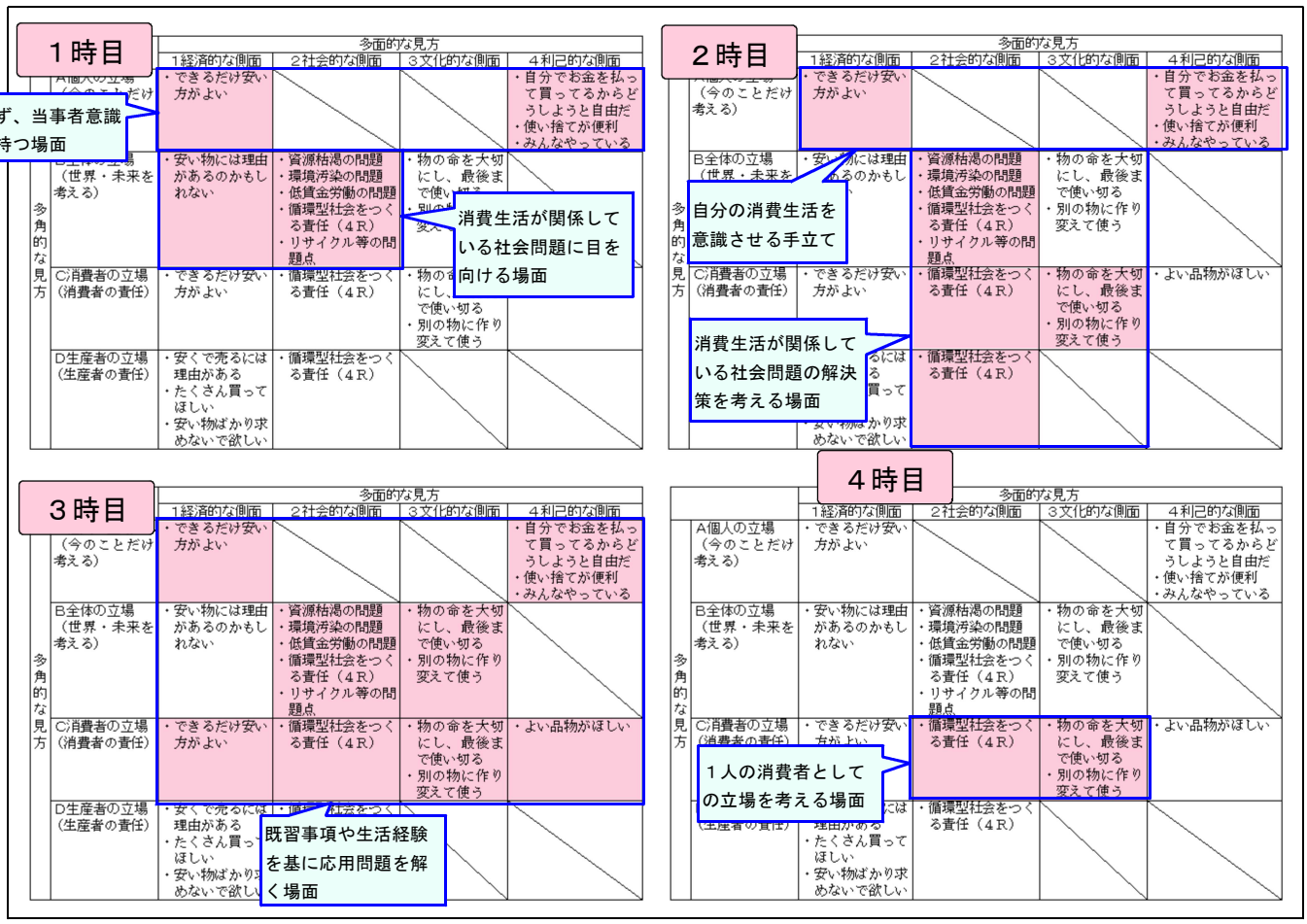
図14　中学校の研究の流れ

本研究では、育てたい多面的・多角的な見方を具体的に次の考えました。

表３　中学校の実践で育てたい多面的・多角的な見方

		多面的な見方			
		１経済的な側面	２社会的な側面	３文化的な側面	４利己的な側面
多角的な見方	A個人の立場（今のことだけ考える）	・できるだけ安い方がよい			・自分でお金を払って買ってるからどうしようと自由だ ・使い捨てが便利 ・みんなやっている
	B全体の立場（世界・未来を考える）	・安い物には理由があるのかもしれない	・資源枯渇の問題 ・環境汚染の問題 ・低賃金労働の問題 ・循環型社会をつくる責任（４R） ・リサイクル等の問題点	・物の命を大切にし、最後まで使い切る ・別の物に作り変えて使う	
	C消費者の立場（消費者の責任）	・できるだけ安い方がよい	・循環型社会をつくる責任（４R）	・物の命を大切にし、最後まで使い切る ・別の物に作り変えて使う	・よい品物がほしい
	D生産者の立場（生産者の責任）	・安くで売るには理由がある ・たくさん買ってほしい ・安い物ばかり求めないで欲しい	・循環型社会をつくる責任（４R）		

４時間の授業展開においては、多面的・多角的な見方の育成を次のように計画しました（**表３**）。



資料１　授業で育てたい多面的・多角的な見方点

：その時間に育てたい多面的・多角的な見方

：授業での場面

ア　研究のねらいに迫る題材の工夫

(7)　事前意識調査結果による課題の絞り込み　　日常の生活行為の想起

事前の「家庭生活アンケート」によると、消しゴムなどの文房具を失くすことが多く、その場合見つかるまで探す生徒は20％でした（次頁**図15、図16**）。また、日常の生活で物を無駄にしているという意識は低いことが分かります（**図17**）。環境に配慮した生活についての意識も低い結果が出ています（**図18、図19、図20**）。

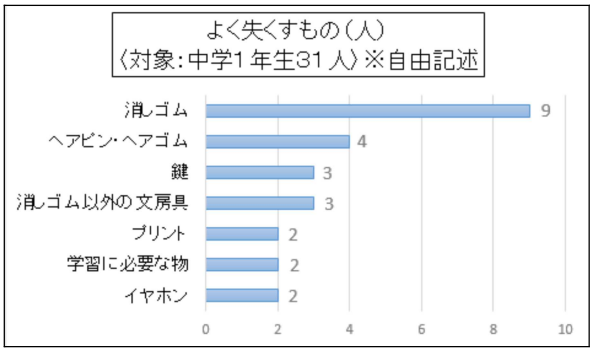


図15　学習前の家庭生活アンケート　結果１

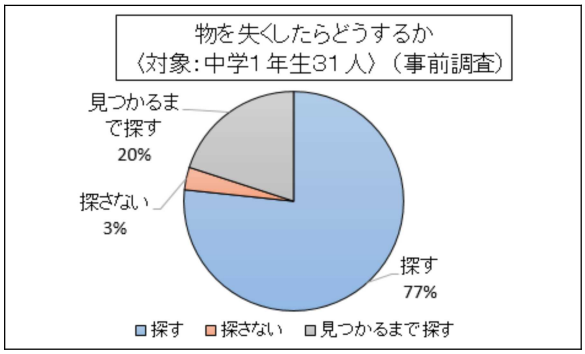


図16　学習前の家庭生活アンケート　結果２

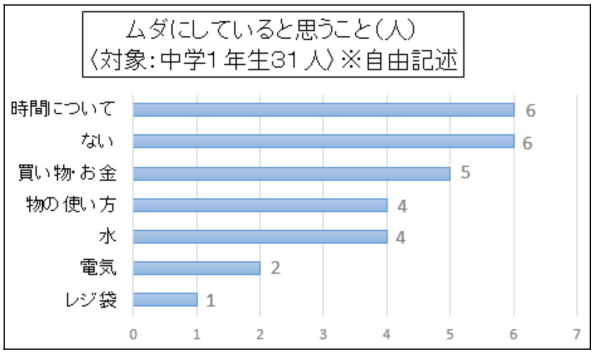


図17　学習前の家庭生活アンケート　結果３

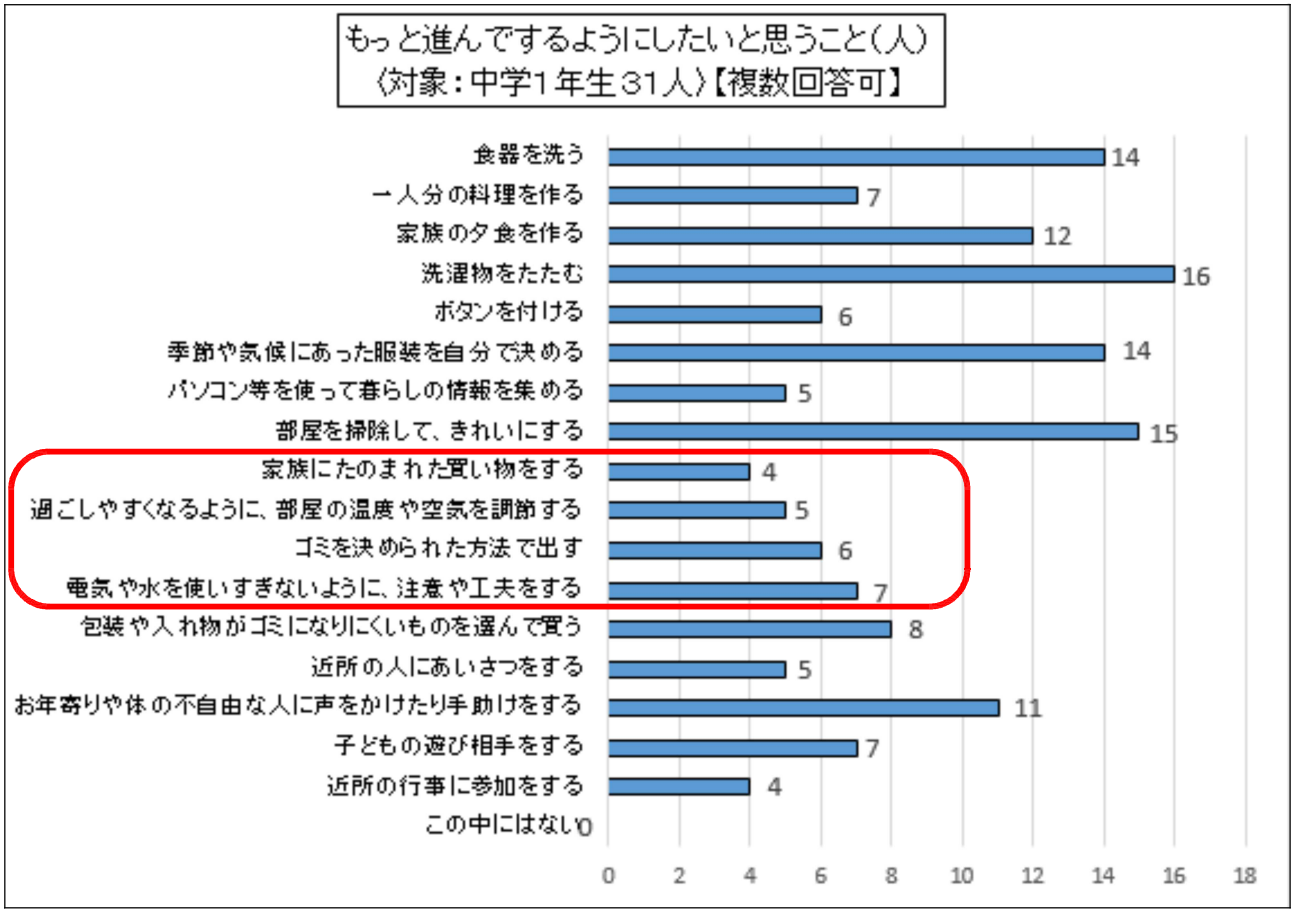


図18　学習前の家庭生活アンケート　結果４

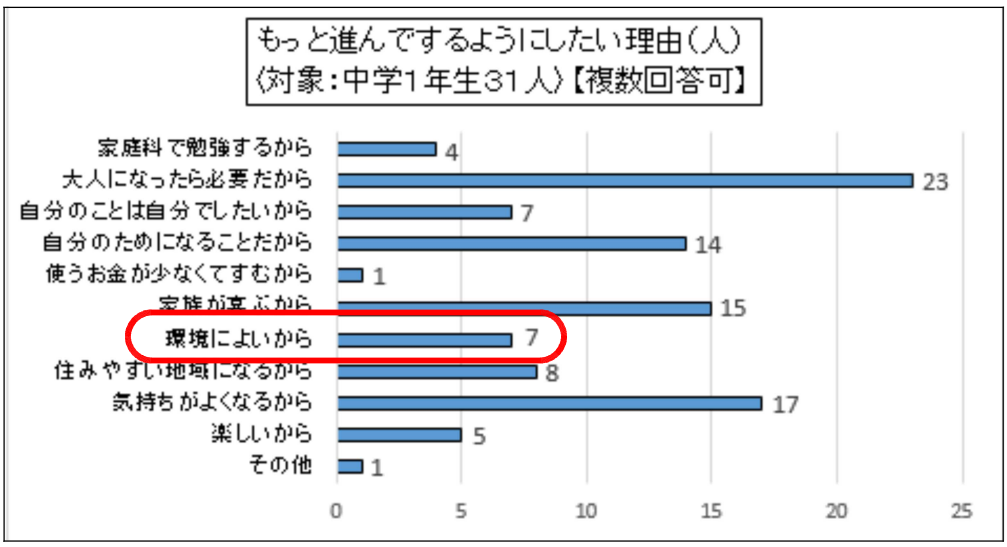


図19　学習前の家庭生活アンケート　結果５

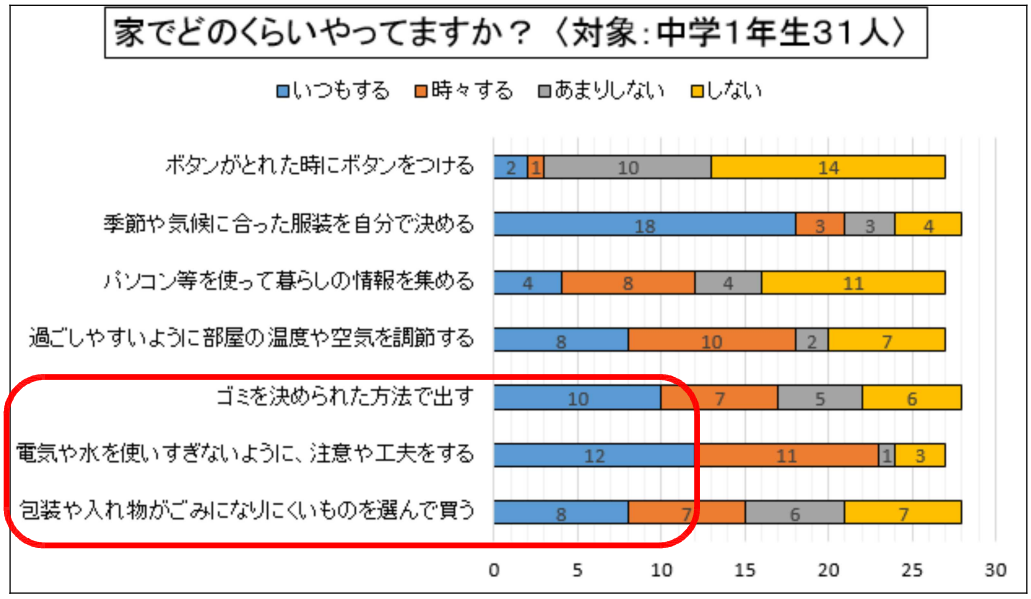


図20　学習前の家庭生活アンケート　結果６

（イ）　生徒の生活実態に合わせた教材の活用

日常の生活行為の想起

「今、欲しい物」として、８名（25%）が「服・靴など」を挙げており、ファッションへの興味が高まり始めた時期だといえます（**図21**）。そこで、教材に「ファストファッション」を取り上げることにしました。割り箸やレジ袋などの使い捨ては意識があっても、衣服の使い捨ては大人でも意識が低い傾向にあると感じます。現在日本人は１人当たり、１年間で２０着の衣服を再利用することなく捨

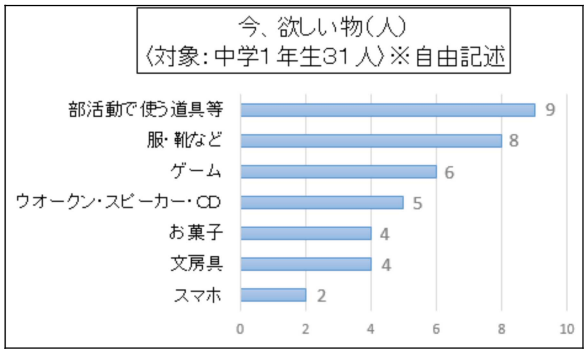


図21　学習前の家庭生活アンケート　結果７

ていると言われていることもあり、ファストファッションを教材に４時間の題材を構成しました。

(ｳ)　当事者意識をもたせて学習課題を設定

日常の生活行為の想起

問題解決的な学習は、生徒が自分の生活の問題に気付き、それを基に課題を設定する過程がとても重要になります。本題材では、**図22**のような流れで課題設定を行いました。まず、最初に生徒自身の消費生活の実態に目を向けさせる場面を設定しました。これにより生じた生徒の問いを教師が引き取り、指導にのねらいを加味して課題設定をしました。

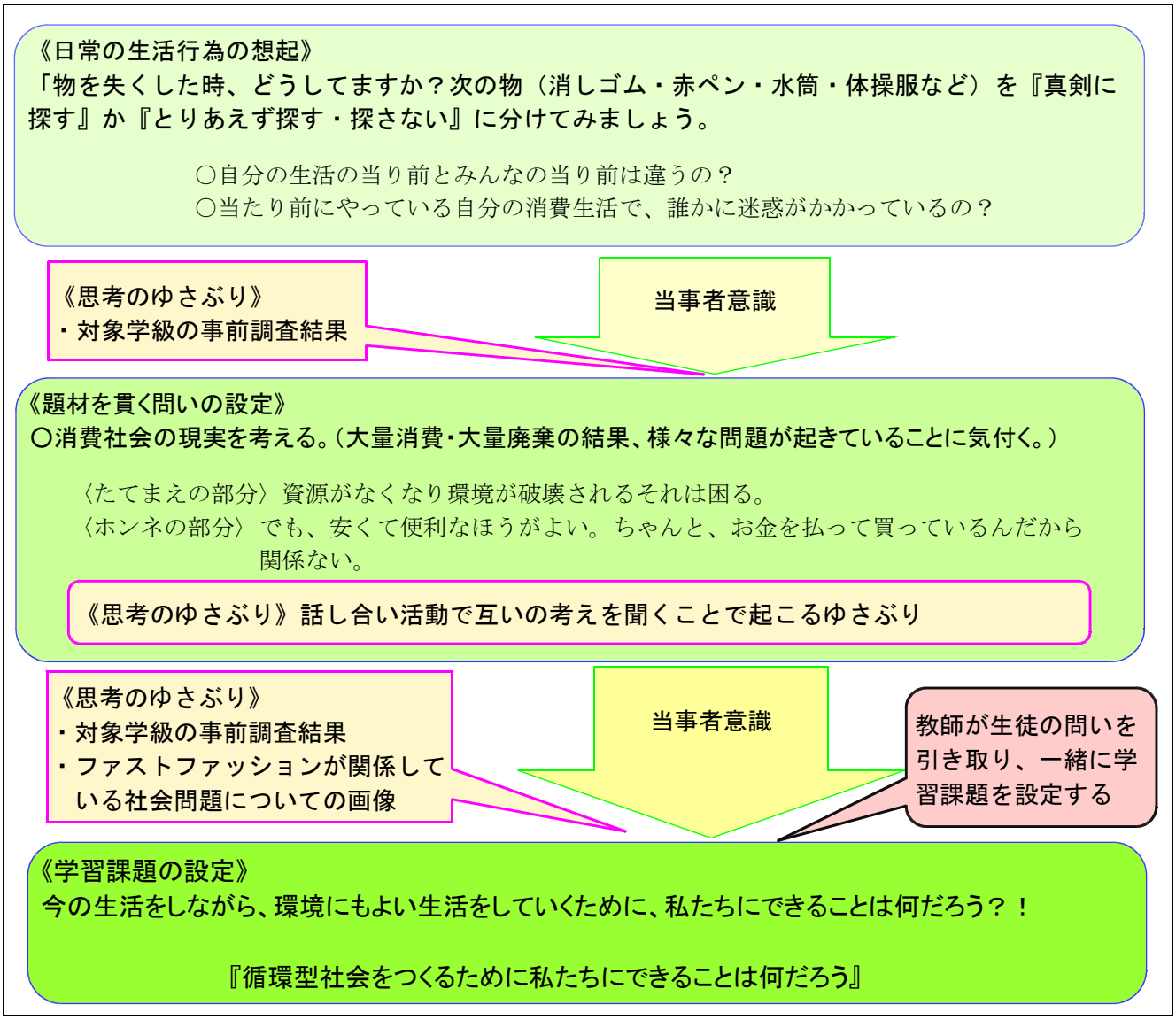


図22　題材の学習課題の設定と生徒の思考の流れ

(エ)　授業の振り返りの工夫

日常の生活行為の想起

習得の過程である「第１時目：私たちの消費生活と社会問題」「第２時目：循環型社会と４Ｒ」では、授業の振り返りを、「今日学習した内容で、家族にも教えてあげたいことを、３つ以上あげてみましょう」としました。これにより、自分や自分の家族の生活を想起するきっかけになると考えました。また家庭での話題にすることで、家族からの意見を聞くこともでき、多面的・多角的な見方を育てるのに効果的だと予測しました。

(オ)　実際に起こりうると想定される応用問題

日常の生活行為の想起

習得した知識の活用場面で、応用問題に取り組ませました。学習問題は現実に起こりがちな場面設定にし、実際の生活を思い起こさせることにより生徒の本音の部分を引き出し、理想と現実の間で葛藤させることをねらいました。これにより更に当事者意識をもって課題解決に取り組めると考えました。

(カ)　物の使い方についての状況調査

日常の生活行為の想起

節約術などの本やテレビ番組はありますが、実際に級友が行っている実践例ほど興味を持ち実践の動機付けになるものはないと考えます。自分の家庭での状況を改めて見直す機会になることもねらいました。調べてきた結果は、家庭状況や個人情報等に配慮して教師が集計をして提示し、共有化を図りました。

(キ)　アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた題材計画

協働学習

本研究のねらいである「自らの課題に気付き、課題解決を図ろうとする生徒」を育成するためには、アクティブ・ラーニングの視点が重要になってきます。題材も３つの視点を踏まえて計画しました（図23）。

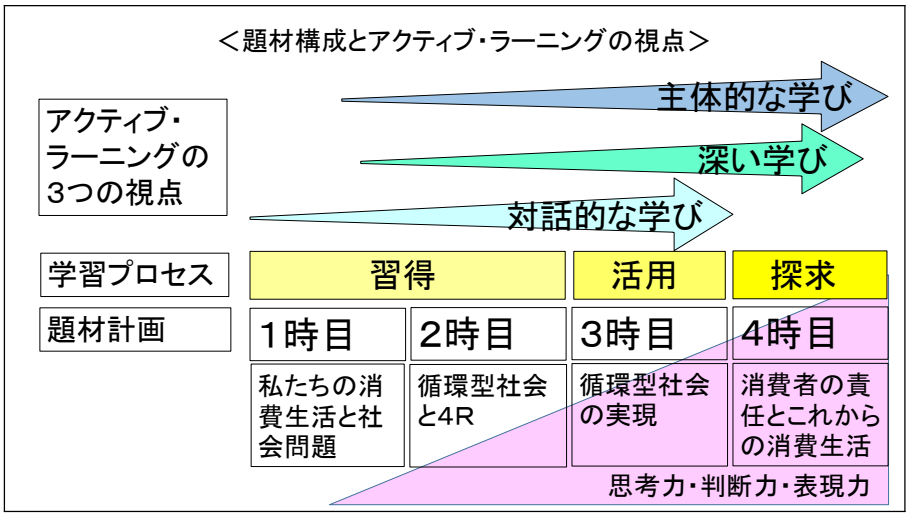


図23　題材構成とアクティブ・ラーニング

(ｸ)　段階的に深まっていく話合い活動

協働学習

現在の子供は、考えたり表現したりすることを苦手に思っていると感じます。そこで、段階的に話合い活動を進めていきました。

a　話し合う内容を段階的に難しくする

発問内容に加え、発問に使う言葉もできるだけ簡単なものにし、生徒が何を考えたらよいのか分かりやすくしました。

１時目：「たくさん作った結果どうなっただろう・たくさん捨てた結果どうなっただろう」

２時目：「どうすれば、ごみ（ごみになるもの）を増やさないですむだろう」

３時目：「あなたは、Ａさんの行動をどう思いますか」

b　話し合いの方法を、段階的に身に付けさせる

生徒達は自分の考えをワークシートンには書くことができますが、それを話すとなると途端に消極的になります。お互いの考えを伝えやすくする方法として、付箋紙とカラーシールを使用して、段階的に話合い活動が深まるようにしました（図24）。

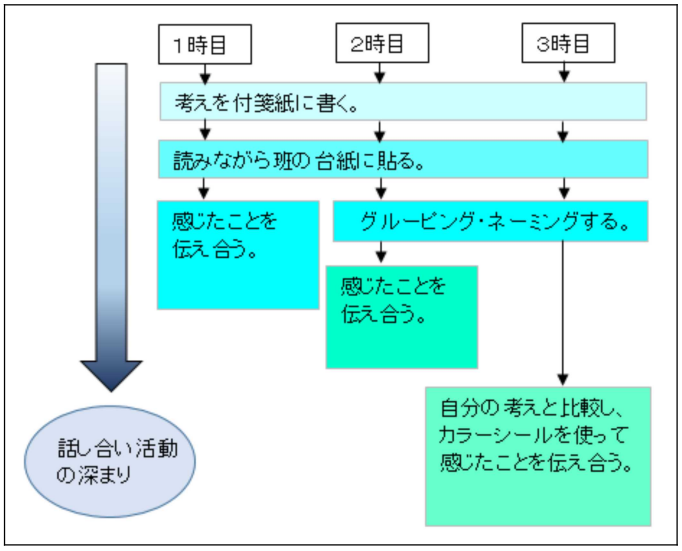


図24　段階的な話合い活動

(ｹ)　実践記録

家庭科の教科の特徴は、授業での問題解決的な学習後に、家庭や地域での実践がある点です。一つの題材が終わった後や家庭分野から技術分野に変わった後に、継続して家庭や地域で実践する機会を設けることは、家庭科の教科のねらいに迫る上でとても重要といえます。本研究のねらいが達成できたのかを検証することに加え、生徒の実践への意識付けを目的に実践記録に取り組ませるようにしました。

イ　授業の実際

１　題材名　循環型社会をつくるために私たちにできることは何だろう　　（内容Ｄ－（２））

２　指導観

2001年に循環型社会形成推進基本法が、2012年に消費者教育推進法が制定された。2005年には国連ＥＳＤの10年がスタートするなど、持続可能な社会を構築していくことが急務となっている。しかし現実は、大量生産・大量消費・大量廃棄の問題が依然として解決できていない。便利さや安さを追い求めた消費生活が、資源の枯渇・廃棄物処理・環境汚染・児童労働など様々な危機的問題につながっている事に気付かずに生活を続けている。中学校学習指導要領解説　技術・家庭編には、「Ｄ身近な消費生活と環境」において、「社会において主体的に生きる消費者をはぐくむ視点から、消費の在り方や環境等に配慮した生活の仕方に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得するとともに、持続可能な社会における生活に営みへの足掛かりとなる能力と態度を育てることをねらいとしている。」(1)と記されている。

本学級の生徒は、衣服の購入は親にしてもらっている生徒が多い。小学校では、総合的な学習の時間や社会科でリサイクルやごみ問題などの環境についての学習は行っている。しかし事前調査によると、文房具などを失くした場合、見付かるまで探す生徒は全体の20％と少なく、よく失くす物として消しゴムなどの文房具が多かった。また、時間を無駄にしている意識はあっても、物を無駄にしている意識は低かった。今欲しい物として、31名中８名が服や靴と答えた。１学期の衣服の選択の学習で、衣服の選択を失敗した場合、その衣服をどうしたかという問いに対し、タンスに入れたままと答えた生徒は23名（延べ人数）だった。

本題材では、まずファストファッションを取り上げる。ファストファッションの裏側では、予想も付かない社会問題が起きており、その驚愕の事実を知ることで、当たり前のように行っている消費生活に大きなインパクトを与えることができると考える。自分の消費生活に課題意識をもたせるためには、消費者の本音を引き出したり、課題が解決されにくい背景にじっくり目を向けさせたりすることが重要である。対話的な学習の中で多様な考えをやり取りさせたり、多面的な視点から考えさせたりすることで、学びを深めていきたい。また、持続可能な社会の構築のためには、循環型社会づくりが不可欠であることを、消費者市民社会の視点を取り上げながら気付かせたい。

３　題材の目標

自分や家族の消費生活が環境に与える影響について考え、環境に配慮した消費生活を工夫して実践できる。

４　学習活動における具体的な評価規準

・環境に配慮した消費生活について関心をもって学習に取り組み、よりよい生活を実践しようとしている。（関心・意欲・態度）
・環境に配慮した消費生活について課題を見付け、その解決を目指して自分なりに工夫している。（工夫・創造）
・消費生活と環境とのかかわりについて理解し、基礎的・基本的な知識を身に付けている。（知識・理解）

5　題材の評価規準

生活や技術への関心・意欲・態度	生活を工夫し創造する力	生活の技能	生活や技術についての知識・理解
ア　消費生活と環境のかかわりについて関心をもち、自分や家族の消費生活に問題意識を持つ。 イ　循環型社会の実現に向けて自分にできることを実践しようとしている。	ア　既習の学習事項を基に循環型社会の実現のための課題に気付き、その解決方法を実際の消費行動と関連付けて考える。 イ　自分や家族の消費生活の課題の解決方法を工夫している。		ア　循環型社会について理解している。

6　題材計画（全４時間）

学習課題	主な学習事項	時配	教師の指導・支援	評価規準	育成したい多面的・多角的な視点
習得	1　自分の消費生活行為を再現する。 （題材を貫く問いの設定） 2　衣服の大量消費・大量廃棄（使い捨て）が世の中に与える影響について考える。 （課題発見）	1	1　身近な物を紛失した場合の対応を取り上げ、日頃の自分の消費生活を想起させる。 2　１学期に学習した衣服の選択の学習や実態調査と関連付けたり、生徒にも馴染みのあるファストファッションを取り上げたりすることで、当事者意識を高める。 ファストファッションの裏側で起きている様々な社会問題を画像で提示することで、興味関心を高める。	関心・意欲・態度ア	Ａ－１ Ａ－４ Ｂ－１ Ｂ－２
	1　衣服を大量消費・大量廃棄（使い捨て）してしまう消費者の心理を考える。 2　循環型社会について考える。	1	1　「安さ」「便利さ」だけでなく「宣伝効果・流行」にも目を向けさせながら、消費者の本音をできるだけ引き出す。 2　生徒から出された大量消費・大量廃棄に対する解決方法と関連付けながら循環型社会を取り上げる。	知識・理解ア	Ａ－１ Ａ－４ Ｂ－２ Ｃ－２ Ｃ－３ Ｄ－２
活用	1　循環型社会の実現に向けて、ファストファッションを取り上げた実践的な応用問題を用いて考える。	1 本時	1　リサイクルやリユースの問題点に目を向けさせ、消費者の安易な考えに気付かせることで、循環型社会が実現されにくい現実に気づかせる。 １、２時目の学習を基に実践的な応用問題に取り組ませ、思考力・判断力	工夫・創造ア	Ａ－１ Ａ－４ Ｂ－２ Ｂ－３ Ｃ－１ Ｃ－２

	2　物の一生について考える。		を育てる。 2　物を大切に使うことについて、断片ではなく、サイクルで考えさせる。		C－3 C－4
探究	1　消費者の責任について考える。 2　自分の消費生活を振り返り、実践内容を考える。	1	1　中学生も消費者の１人であることに気付かせ、消費者市民を意識させる。 2　家族と共に実践できる実践内容を検討させ、実践が継続されやすいようにする。	関心・意欲・態度イ 工夫・創造イ	C－2 C－3